

学内広報

2013.11.25

no.1446



短期でも国内でもOK!
東京大学が推進する学部学生のための
留学・国際交流プログラムまとめ

東京大学が推進する 学部学生のための 留学・国際交流プログラム^{まとめ}

留学・国際交流プログラムの基礎知識

「2015年までにすべての学生に海外留学・派遣を含む国際的な学習・研究体験を提供することを目指す」
(行動シナリオより)

- ①学部学生の全体の10～15%が協定校で単位取得を伴う留学を行う。
- ②学部学生の20～35%が語学留学や海外サマースクール等を経験する。
- ③全ての日本人学部学生が留学生との交流体験を持つ／全学部学生が英語による授業を履修する。
(入学時期の在り方に関する懇談会報告書より)

「入学時期の在り方に関する懇談会」による報告書で提言されたのが上の3項目。今回の特集では、②と③にあてはまる短期間のプログラムで、本誌1441号で特集した体験活動プログラム以外のものを主に紹介します。国際体験というとなす思い浮かぶのが①の交換留学などの比較的長期の留学でしょうが、よりハードルが低く参加しやすいのが、夏休みなどに参加可能な短期のプログラムや日本国内でのプログラム。期間、種類、実施主体によって様々に分かれます。

●海外で行うプログラム



JASSO（日本学生支援機構）の分類では、1年以上の留学（海外大学への正規入学など）が長期、1年未満の留学が短期と呼ばれます。国際本部では、1学期～1年の交換留学と区別するため、夏休みなどに行う3カ月未満の留学を「超短期」と呼んでいます。インターンシップには研究機関やNGO等での研修も含まれます。

●国内で行うプログラム



英語で行う授業はまだ少ないのが現状ですが、海外の学生が参加する国内のサマープログラムや体験活動プログラムが充実し始めています。国際センターが行うFACEなどの留学生交流プログラムは気軽に参加できるのが大きな魅力。

●実施主体



国際本部が留学プログラムを中心に担当し、学生支援課が体験活動プログラムを担うほか、各部局や研究室が個別に実施するものも。学外のプログラムに参加する手もあります。

海外でのプログラム例（3ヶ月未満）

世界のトップ校9校から行き先が選べる

● IARU Global Summer Program (IARU GSP)



体験者に聞きました

教養学部3年 **田村 海さん**

～ IARU GSP で UC バークレーに行った3年生の場合～

私が参加したのは、“Media and Global Protest Movements”という、現代のプロテスト運動とマスメディアやソーシャルメディアの関係について学ぶ6週間のコースです。専門性の深化と新たな学問との出会いが同時に可能なプログラムで、多様なバックグラウンドを持つ優秀な学生とともに学び、自分の立ち位置を確認したい、その後予定している交換留学(AIKOM)に向けて英語の負荷がかかる授業に慣れたい、と思って参加しました。奨学金が出るので、安く海外に行けるなら行くしかないと考えたのも事実。6週間といえど安くはないので、奨学金がないと行かなかったかも……。

学業面では、予習時にしっかりリーディングをこなして授業でディスカッションできるようにしておくことが必須でした。中間課題は一人で、期末課題はグループでウェブサイトを制作しましたが、常にアカデミックな英語を求められて大変でした。サイトのテキスト、最終プレゼン、授業での発言など、いかに自分の考えを整理して発信するかの手がかりを得たように思います。

教授の助言で次の一歩が見えた

最終プレゼンは特に記憶に残っています。コンテンツを詰めることに必死でプレゼンの準備をほぼしないで臨んだ結果、酷い出

来で終わり、落ち込みました。教授に反省の意を伝えたところ、励ましてくれるとともに、彼女が昔授業にける時間の倍以上かけて練習していたことを教えてくれました。最初からできるわけではないし、向き不向きはある。でも、練習すれば必ず良くなる。当たり前のことですが、6週間徹底的に教わった教授から言われたことで、次のステップが見えてきたと思っています。

一番大きかったのは友人です。初日、教授が「6週間で家族みたいになる。去年の学生はこの夏も一緒に旅行しているくらいだ」と言いましたが、あまり本気にしませんでした。でも、最終日、本当に別れが辛かったです。過去にも海外のプログラムに参加したことがありますが、ここまで仲良くなったことはないと思います。ともに食し、ともに寝、ともに旅をし、夜な夜な語り合った友人たち。そんな友人が世界中にできたことを本当に嬉しく思います。来夏の夏、皆でコペンハーゲンに集まって欧州を旅しよう、と決めました。前年の先輩たちと同様に。友人たちと話すうちに大学院進学も真剣に考え始めました。

IARU GSPは非常に貴重なプログラムだと思います。人気が集まりすぎると自分の次の参加が危ぶまれるので、あまり言いふらしたくはないくらいです。

短期でも 国内でも OK!!

「すべての学生に海外留学・派遣を含む国際的な学習・研究体験を提供する」。

濱田純一総長が行動シナリオで明確に示したこの指針を具現化するために、

全学で様々な海外留学・国際交流プログラムが実施されています。今回は、そうした取り組みの中から、「短期(3ヶ月未満)」と「国内」、二つのキーワードで括られる学部学生向けプログラムを紹介します。

長期間の留学のほかにも、東京大学はこうした多様な国際体験を用意しているのです。

2008年から続く信頼のプログラム

IARU GSPは、IARU (International Alliance of Research Universities : 国際研究型大学連合) に加盟する世界トップクラスの10大学が共同で行うサマープログラムです(加盟校: 東京大学、オーストラリア国立大学、スイス連邦工科大学チューリッヒ校、シンガポール国立大学、北京大学、UCバークレー、ケンブリッジ大学、コペンハーゲン大学、オックスフォード大学、イエール大学)。毎年6月から8月の間に2週間~6週間程度の期間で開催され、各校がお互いに学生の派遣・受入を行い、各大学の教授陣が、加盟各校から選抜された学生のために集中的なプログラムを実施します。

日本で参加できるのは本学の学生だけ。最近では毎年30名以上の東大生が参加し、短期集中、世界トップレベルの学生と同じ条件で、英語での大量の課題や濃密なディスカッションに果敢に挑戦し、寝食をともにし、人生を変えるような刺激を受けて帰ってきています。

●今年度から始まった新しいプログラムも!

- 香港大学・東京大学合同サマープログラム
- 国立台湾大学・東京大学合同サマープログラム

園田茂人・情報学環教授が中心となり、アジアの有力大学で本学の協定校である香港大学・国立台湾大学との協力により、東京大学の学生のための特別な合同サマープログラムを実施しました(国立台湾大学とのプログラムは2012年に試行済み)。一流教授陣の講義と、両校の学生との協働による企業や関係機関でのフィールドワークと最終報告を組み合わせ、2週間のプログラムで、本学からは学内選考を経て選ばれた32名(香港大学: 20名、国

香港プログラム終了後の学生たち。



立台湾大学: 12名) が参加しました。

香港大学とのプログラムはより企業・ビジネスにフォーカスし、国立台湾大学とのプログラムはよりアカデミックな志向の強いもの。実践的な英語利用の機会が多く、また香港大学や国立台湾大学の学生との協働作業からも学生は多くのことを学び、最終報告会では、関係教員の他、日系企業の駐在員やマスメディアの記者からも高い評価を受けました。「学部の講義やゼミでは決して味わえない「現場感覚」を得た」「考え方の異なる外国人とプロジェクトを進める方法を学んだ」「最後にプレゼンとしてまとめた達成感と充実感は何物にも代えがたい」など、参加学生にも好評。関係教員の準備の負担を軽減し、いかに持続可能にするかが今後の課題となるほど、濃密で充実したプログラムとなっています。

- シェフィールド大学 サマープログラム
- UC サンディエゴ サマープログラム

その他、国際本部では、2013年、本学において多数を占める、「基礎的な英語能力は身につけており、海外留学に興味があるものの、長期で留学するには語学力等の面で不安がある」といった学生を触発・動機づけすること

を狙いとして、英語学習と英語による講義受講を組み合わせたプログラムを英米2大学で実施し、120名を超える応募者の中から67名が参加しました。

●2013年度3ヶ月未満の留学・国際交流プログラム開催地一覧 (国外分)



●国際本部担当の超短期(3ヶ月未満)派遣プログラム参加学生の推移
(交換留学等の1学期/1年のプログラム除く)

・2013年度	約180名(うち学部学生:約130名)	※10月現在
・2012年度	63名(うち学部学生:36名)	
・2011年度	46名(うち学部学生:28名)	

以上は国際本部で担当している代表的な海外大学での3ヶ月未満の超短期留学プログラムの一部で、これ以外にも様々な超短期留学プログラムがあります。また、世界の約30の大学に1学期~1年間留学可能な全学交換留学、教養学部のAIKOMなど、部署間で行われる交換留学、その他部局・研究室単位で実施されるプログラムなども数多く、また大学を通さず個人で海外有力大学のプログラムに参加する学生もあり、ひとくに留学と言っても、全容の把握が難しいほど多様です。

さらに、このような海外大学で実施されるアカデミックな「留学」プログラム以外にも、海外で実施される「体験活動プログラム」や、海外でのボランティアやインターンシップへの参加も学生に人気があります。2012年度からは東京大学とJICAとの連携による短期間の国際ボランティアプログラムも始動しました。本学の学生の国際体験の選択肢は充実の一途を辿っています。

●海外留学・国際交流情報ウェブサイト (「東大」留学で検索)
<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/administration/go-global/>

国内でのプログラム例

東大生と海外学生の協同ワークショップ@東北&駒場

● Todai Innovation Summer Program 2013

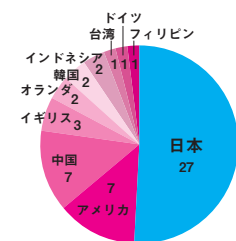


知の構造化センター長

堀井 秀之

「人間中心イノベーション」を標榜する教育プロジェクト「i.school」を2009年に設立した堀井先生。教育企画室、入学時期の在り方に関する懇談会にも所属し、東大が推進する総合的教育改革を担っている。工学系研究科社会基盤学専攻教授。

●参加者の国籍



UCバークレーから21名、オックスフォードから9名、ハーバードから5名、清華大学からは100名もの応募があったそう。

発起人に聞きました

常々、学生が主体的に海外の学生と交流する機会を増やしたいと思っていました。ただ、大学の通常のカリキュラムに新しい要素を加えるのは難しい。その点、夏休みのプログラムならあまり無理なくいい機会を作れます。学生からすると、海外渡航は魅力的ですが、時間的にも経済的にもハードルが高い。でも、国内のプログラムならハードルは当然下がります。まずはできることから始めようと思い、海外の学生26名と東大生27名を公募で選んで、駒場で9日間、岩手県・大槌町に移動して4日間のワークショップを開催しました。

テーマは「東北の復興」と「日本のポップカルチャー」。大槌では地元の高校生も加わり、総勢70余名で「大槌町の未来と夢」を考えました。宿泊は救援・復興支援室がある遠野にて。1日目は馬も寝起きする藁葺きの建物で、2日目は3〜4人にわかれての民泊。日本の学生や私にとっても貴重な体験でした。海外の参加者からは、いろいろな国の人と話してものの考え方が国によって違うことを知れてよかった、という声があがっていました。すべて英

語でしたが東大生は海外一流校の学生と互角にやり合っていて頼もしかったですね。発想力は東大生の方が上だったと思います。

海外一流校から850人の学生が応募

当初は不安でしたが、海外30人の枠に850人の応募があり、驚きました。数もそうですが、海外一流校からの反応の大きさに手ごたえを感じました。850人の裏には応募を検討した学生が10倍はいます。プログラムを通じて東大を知った学生はさらにその10倍はいるでしょう。東大のいいPRにもなったと思います。UCバークレーの担当者からは「850? Congratulations!」と言われました。ある意味、ライバルとして認められたかな、と(笑)。

今回、職員も一人参加してくれましたが、サマープログラムは職員研修にもいいと思います。国際化のために多くの職員を海外に送るのは難しいですが、国内のこうしたプログラムなら同様の効果が低コストで実現できます。いろいろな人がいた方が効果的なので、来年は職員のほか一般の社会人も巻き込みたいですね。夜行バスがきつかったのも、次回は新幹線で移動できるとよいのですが……。

自然科学専攻学生向けのサマープログラム

● UTRIP The University of Tokyo Research Internship Program



2010年に始まった研究中心型のプログラムで、海外有力大学在籍の自然科学に関心がある学部生が対象。UTRIP2013には世界29ヵ国157大学から430名もの応募があり(前年は310名)、20名の定員を28名に増員して行われました。様々な地域の学事層に対応するため、日程は前期と後期の2種を用意(各6週間)。英語で行われた10コマの講義には、理学部の日本人学生も参加し、講義後のコーヒープレイクでは、通常は味わえない自然科学を軸とした英会話を体験しました。また、希望分野の研究室に入った参加学生各々に日本人学生が指導係としてつき、研究から生活上の相談までを支援。互いに貴重な時間を共有しました。

柏キャンパスで行われるサマープログラム

● UTSIP Kashiwa The University of Tokyo Summer Internship Program in Kashiwa



新領域創成科学研究科によるサマープログラム。初回となった今年は、海外の大学から15名の学部生が来柏し、全38日間の日程に参加しました。宿泊先は柏IIキャンパス内にあるインターナショナル・ロッジ。1週目は、物質系、メディカルゲノム、社会文化環境学、国際協力学の教員による共通講義を行うとともに、日本文化巡りや日本語教室も開催。2週目以降は学生が13の研究室に分かれ、指導教員の下で各自の希望する研究活動を行い、研究室の日本人学生と交流を深めました。最終日には研究成果を日本人学生の前で披露する発表会を実施。参加者たちには修了証が授与されました。



ハーバードビジネススクールも導入している「ケースメソッド」と、ischoolスタイルのワークショップがプログラムの柱。宿泊費と東北への交通費以外は参加者の負担でした。



地元・大槌高校の高校生の案内で大槌町内を歩き回った学生たち。高校生たちが英語で行ったプレゼンのレベルの高さには、海外の参加者からも驚きの声が上がっていました。



世界のトップ大学の学生とともに学べる

● IARU GSP 東京大学開講コース



IARUに加盟している世界のトップレベル9大学の学生を東大キャンパスに受け入れるサマープログラムです。2008年から続くこのプログラムで用意されているのは、Sustainable Urban Management (工学部)、Nanoscience (工学部)、Japan in Today's World (法学部)、Introduction to the Japanese Language (日本語教育センター)の4コース。毎年、加盟各大学の選考を経て推薦された学生が参加しています(2013年は計41人が参加)。各コースの講義は、東京大学の学生であれば、集中講義として受講可(教養学部前期課程の学生は履修不可)。いつものキャンパスで海外大学の学生と交流でき、英語で行われる授業に慣れることができるため、留学の準備としても非常に効果的。学内で手軽にできる「留学」体験だと言えます。



本部国際交流課の 担当者に聞きました



留学フェアで学生の相談を受ける様子

東大生の「外向き志向」 をひしひし感じています

現在の国際交流課のメンバーのうち、最古参の職員が着任した3年前までは、本部で担当する短期の留学プログラムは数えるほどでした。日本の他の総合大学では、部局レベルに加え全学の学生が留学可能な協定校を100以上持ち、毎年本部主導で数百人規模の学生を海外へ送りこんでいる大学も多い中、東大では3年前までは全学的な交換留学制度は存在せず、全学部学生が留学可能な協定校もようやく2校できたのみという状態でした。東大では教養学部のAIKOMや各学部の交換留学など、伝統的に部局が中心だったという事情もあります。

そこから総長・役員のリーダーシップにより、各部局の教職員の方々の多大な協力も得ながら、本部で担当するプログラムや交換留学の協定校を拡大してきました。また、大規模な留学フェアや小規模な説明会の実施、留学ガイドブック、ウェブサイトやSNSの整備など、広報・情報伝達フローの改善も進めました。その結果、国際本部が担当するプログラムで留学する学生は、交換留学等の1学期～1年の留学で2011年度：9名→2013年度：約40名、3ヶ月未満の留学については2011年度：46名→2013年度：約180名と大幅に増加し、来年度もさらに増える予定です。定員の都合上選考で落選した学生、各部局のプログラムや体験活動プログラムに参加した学生、個人で留学した学生なども含めれば、海外に出た(出たい)学生は相当数に上るはずです。

東大生と接していて感じるのは、彼らは決して内向きではないということです。高校以前から留学の思いを秘めていた学生、まずは短期間のプログラムに参加しそれがきっかけで交換留学に応募する学生など、環境が整えば外へ出たい学生はたくさんいます。留学フェアなどで相談に来る学生の熱気もすごいものがあります。

ただし、他大学に比べると、本学はようやく一歩を踏み出したところといった感じで、課題も山積みです。派遣プログラムや奨学金の拡充、危機管理体制のさらなる強化、留学する学生増に伴う業務の効率化、海外学生の受入体制の整備等々……。学事暦が変更されれば、ますます留学する学生は増えることになります。引きつづき、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

協力：国際本部、知の構造化センター 制作：本部広報課 (22031)

プロジェクトで復興を支援する

再生のアカデミズム

【実践編】

第14回

プロジェクト名

東日本大震災デジタル
アーカイブ

「いま見えないものを見せる」をテーマにこれまで大仏や飛鳥京やバイヨン寺院などの複合現実化を手掛けてきた池内・大内研究室。現在、「東京大学大槌イノベーション協創事業」に協力して旧町役場庁舎の複合現実実モノメント化を進めている池内克史先生にお聞きしました。

—— 複合現実実モノメントとは何ですか。

池内 記憶を風化させないための、ICTを用いた現代的な記念碑です。昔ながらの石碑を積極的に見ようとする人はあまりいませんよね。大槌町役場の旧庁舎は、まるごと残す手もありますが、それだと費用的に大変ですし、見たくない人に見えてしまうという問題もあります。では映像で残すモノメントはどうかというと、費用が安くすむし、見たくない人は見なくてすみますが、存在感はどうしても薄くなります。そこで、庁舎の一部だけを残し、庁舎全体のCG映像を特別なゴーグルで見るという案を考えました。庁舎の三次元データを記録し、残った実物部分にそれを重ね合わせるものです。

—— それはどうやって作るのでしょうか。

池内 形の情報と色の情報が必要ですが、形については、ある地点から対象への距離情報が入ったデータを様々な方向から取ります。視点からA点までは5m、B点までは5m50cmというふうに、対象にレーザーを照射して返ってくる時間から距離を導きます。2011年4月、三次元形状計測装置を用いて、建物の外から中から屋上から、360度全方向にレーザーを照射して約300枚の画像を記録。その後、全方位カメラで二次元画像を撮影し、色の情報を得ました。距離と色の情報を集めたら、対応関係を計算してそれらを合わせ、点から面のデータにします。過去のプロジェクトで培った、大量の画像をつなぎ合わせるソフトが我々の強みです。

重要なのはどう活用するかですが、私がぜひやりたいのは、大槌町全体の複合現実化です。ゴーグルをかけてバスに乗り、現実の景観に重ねたCG映像を見ながら町を巡るツアーを実現したい。神戸大学の先生が作った大槌町のジオラマから三次元データを取って「バーチャル大槌町」を作ります。町に行き、役場跡でゴーグルをつけると庁舎の全貌が見られる。バスに乗り込むと昔の街並みが浮かびあがる。町全体がモノメントです。

—— 昨年実現させた「バーチャル飛鳥

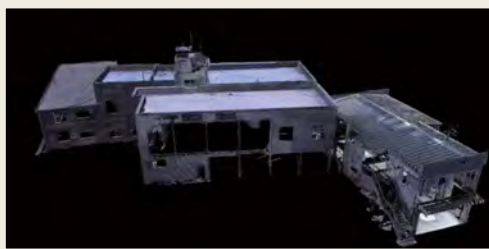
京」ならぬ「バーチャル大槌町」ですね。

池内 観光地にある双眼鏡みたいなものではなく、案内役の人が生の声で説明する形を想定しています。ガイドはロボットではなく人でないとダメ。人と人のインタラクションを軽視してはいけません。また、こういうシステムは、コミュニティにいる人が作り上げるものでないといけません。第一弾は来年我々が作るとして、以降はコミュニティの人たちが更新できるようにしたいです。写真を貼り付けたり、目印をつけたり、年々コンテンツが成長するシステムを用意したい。その方がより愛着が生まれますよね。

もうひとつ重要な点は、建物の外観だけでなく中まできちんとデータを残したこと。モノメントとしてだけでなく、津波で壁がどう歪んだか、などの解析にも有効です。バイヨン寺院のプロジェクトでは、全体構造が0.94度回転していた、塔に173ある尊顔が3つにグループ分けできたなど、我々の三次元データの解析から考古学上の新発見が生まれました。今回のデータからは、津波で水がどう押し寄せたのか、建物がどのようにダメージを受けたのか、などがわかるかもしれません。そういった意味でも価値があるのではないかと思います。



形のためのデータ（左上）に色をつけたのが左下の画像。360度どの方向からでも旧町役場庁舎の姿を見ることが出来る。下は建物内部の形状を記録したもの。鉄骨やがれきが散乱する様子がそのままデータ化されているのがわかる。



池内・大石・小野グループでは、改修前の安田講堂の三次元データも記録しているそう。「今後も学内の古い建物を改修するケースは出てくるはず。震災関連のアーカイブも含め、こうした三次元データをまとめて保存するセンターを学内に設けるべきではないでしょうか」（池内先生）

プロジェクトに関する問い合わせ

生産技術研究所 教授 池内克史
cvl-staff@cvl.iis.u-tokyo.ac.jp

構成：本部広報課（内線：22031）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第7回

手塚 安澄

渉外本部
渉外・基金課企画チーム 係長

なぜ、教職員が大学に寄附をするの？

6回にわたり「東大基金」の紹介をしてきましたが、今回は寄附のお願いです！構成員の方の東大基金との関わり方は多様です。寄附の受入、基金の奨学金プログラム担当など、業務上で接点がある方もいるでしょう。特定基金担当の教職員の方は、渉外本部と日々連携して活動して頂いています。また、私たちが過ごすキャンパスの中にも、二食の改修、駒場キャンパスの屋外トイレの整備、総合図書館のポーチ外灯の復元、東大球場の人工芝貼替えなど、基金の支援によるものが結構あります。基金は「自分とは関係ない」と思われる方も多いかもしれませんが、実は、大学のあちらこちらに東大基金の成果や関連業務があるのです。

個人的な話ですが、私は東大基金ができる前から給与控除で留学生支援基金に寄附をしています。きっかけは、留学生業務に携わった時。彼らが東京で勉学を続けるのに経済的に苦勞している様子、また受入れ教員が留学生（とその家族）の生活まで面倒をみている実態を知り、少しでも留学生の環境が改善できればという思いから始めました。今でこそ渉外本部の職員となりましたが、寄附のきっかけは寄附業務に直接関係のない部署から見た大学の姿でした。

ご自身が関わる東京大学的一端から、「自分の働く大学が誇れる場であり続けてほしい」「頑張る学生を応援したい」「基礎研究を支えたい」…そんな思いを持たれたら、それが寄附のタイミングです。「給与控除（500円～）」「アニュアルギフト（クレジット決済・毎月/年2回/年毎に1,000円～）」は、少額から継続して寄附できるので、手軽な寄附の方法だと思います。それぞれの寄附方法の詳細は、東大ポータル「便利帳」でご確認ください。

**教職員寄附
1億円達成
キャンペーン**
あなたのその寄附が
東京大学を変える！
実施中
キャンペーン期間
2011/12/1～2014/3/31

すっかりお馴染み？の学内ポータルの
バナー

東京大学基金事務局

教職員寄附1億円キャンペーン中！

TEL 03-5841-1217
内線21217E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい！

第6回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



オーストラリア

トーマス・シノットさん

Thomas Synnott

教養学部英語コース
(PEAK)2年

シドニーの西、スプリングウッド出身。テニスとクラシックが好き。ピアノで弾くのはベートベンやドビュッシー。

Q. どうして日本に来たんですか？



中学の必修科目だったのを機に日本語を勉強し、高校時代には岐阜に半年間留学してとてもいい経験を得ました。地元では国内で進学するのが普通でしたが、自分はもっとチャレンジングな生き方を選びたいと思ったんです。

Q. ではどうして東大を選んだんですか？

日本語の先生がPEAKを勧めてくれたんです。応募締切直前に（笑）。合格を知り、3ヵ月通ったウェスタンシドニー大をやめて来ました。



Q. いま勉強しているのはどんなこと？



「国際教養コース」で教養科目全般を学んでいます。専門外の世界に触れられるのがチャレンジングですね。将来は国際法を研究して外交や国際紛争の分野で貢献したいです。

Q. 日本に来て戸惑ったことはありますか？

日本語が難しいです。特に漢字が。オーストラリアでは優秀な部類だったんですが、ここでは同級生が皆優秀で…。漢字圏出身の人と比べると差は大きいですね。でも、これ乗り越えれば自分が成長できると信じています。



Q. 出身地の自慢を教えてください



ブルーマウンテンズ国立公園が◎。写真は園の奇岩「スリーシスターズ」。顔に見えますよね。



人の面倒みかけがいいのも自慢で、先日の山火事では住民の助け合いが話題になりました。

協力：国際センター駒場オフィス 制作：本部広報課

※ご本人が英語で話した言葉を本部広報課が日本語に訳して掲載しています。

ワタシのオシゴト 第93回

RELAY COLUMN

農学生命科学研究科附属演習林
北海道演習林調査第二係

大川 あゆ子

未来の森を作る



ヤチダモの胸高直径を測定。72cmなり。

北海道演習林はとにかく広い（23,597ha）ので、富良野観光で郊外を車で移動された方は必ず目にしていると思います。

私のオシゴトは木の販売をするために、これから伐採しようとしている区域に、今どれぐらいの資源量があるかを調査することです。測量や伐採木の選定など山を歩き回る仕事が多く、冬もスノーシューをはいて雪上で仕事をしています。

歩き回る仕事が多いというものの、測量や製図の技術の進化は目覚ましく、現在ではGPSやデジタル測量機器を駆使し、GISで図面を作っています。とはいえ、4月に係の異動があったばかりで先輩方から仕事を教わっているところなのですが…。

ちなみに直径が70～80cmもある大木も山には沢山生えています。ハリギリやウダイカンバの大木の年輪を数えたところ、なんと200年以上！森の未来を想像して伐る木を選ぶなんてまだまだできそうにありません。



係の皆さんと一緒に

得意ワザ：昆虫好きです。カエルもヘビもクモも平気。
自分の性格：おしゃべりです。

次回執筆のご指名：斉藤あゆむさん

次回執筆者との関係：H19年度採用の同期です

次回執筆者の紹介：どんな仕事内容なのか興味津々

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する
“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第96回

科学技術交流フォーラム

—近未来の社会・経済にとって

「解を出すべき課題」の解決に向けて

大学内では日々、様々なシンポジウムが開催されています。それぞれに様々な目的がありますが、私たち産学連携本部では「新しい連携活動、プロジェクトを創出する」ことを目的として活動を行っています。その中でも、近未来の社会・経済にとっての「解を出すべき課題」に取り組むため、専門分野や産学の枠を横断したチームの形成を促す「科学技術交流フォーラム」について、今回はご紹介したいと思います。

このフォーラムは2005年8月に開始され、昨年までに23回が開催されています。そのテーマはサービス科学からジェロントロジー、太陽電池から複雑系科学まで多様です。これらの題材は、私達の日常業務としての産学の対話の中で浮かび上がって来た課題から選び出されています。

テーマ案が決定したところで、押えるべき技術項目や本学の持つ強みを分析、その領域を率いる先生方にご相談し、プログラムを決定しご講演の依頼を行うとともに、開催案内を行います。「社会・経済にとって解を出すべき課題」に関するフォーラムということもあり、750社を超える企業・団体メンバーで構成される東京大学産学連携協議会のメーリングリストなどを通じて広く周知し、毎回150名ほどのご参加を頂いています。

フォーラム開催後も活動は続きます。フォーラムの場で講演者から発せられるメッセージや、その後アンケートなどを通じて得られる情報を基に、こういった課題に関心が高いのか、どのような活動を生み出していく必要があるのかをより具体的に検討し、産学でのチーム形成を試みます。こうして生み出されたチームの一例として、10社を超える企業メンバーの参加を得て2010年に発足したアンビエント社会基盤研究会が挙げられます。

2013年も11月27日に第24

回目のフォーラムを開催し、今後も継続して開催を予定しておりますので、東京大学だからこそ分野横断で取り組むことのできる「解を出すべき課題」や、その解決に向けた取り組みの在り方等について、是非皆様からのご意見をお寄せ下さい。



第24回科学技術交流フォーラム（2013.11.27開催）

「社会を変えるものづくりイノベーション」

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/event/forum/forum24.html>

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第76回 バイブル

教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門 非常勤講師
科学ジャーナリスト

佐藤 年緒

台風接近に学ぶ防災リテラシー

台風26号の接近で翌日の講義ができるか心配をしていた矢先に大学の担当係から「あすの1限は休講。2限以降は午前8時に判断するのでHPで確認するように」とのメールが入った。早めに注意を喚起し、当日朝の状況を見ながら判断するという二段構えの連絡である。結果は、駒場に強い風雨もなく2限以降は平常通り、夕からの授業に無事学生が顔を揃えた。

担当する科学ライティング演習では「ふるさとの安全と安心を伝える」をテーマにしていただけに、台風襲来は格好の題材だった。学生に前夜からの対応を聞くと、「休講なのでゆっくり寝ていた」「大学近くなので心配なかった」とのったりした反応。千葉から来る学生だけは「午前8時に『講義あり』と言われても2限に間に合わない」と交通マヒの影響を話した。

同じ東京都の伊豆大島では土石流災害が発生、大ニュースになった。大島町役場では町長と助役が不在で、留守役の総務課長ら職員はいったん帰宅し、その間気象庁からの土砂災害警戒情報のファクスに気づかなかったという。深夜に登庁して初めて分かったが、それでも避難勧告を出さなかったと新聞紙面で非難された。

午前3時すぎ時間雨量は120ミリを超えた。深夜に避難させても安全を確保できるか、町幹部が躊躇したとの報道もあった。時間100ミリ以上の雨とは、31年前、私が駆け出し記者だったころに長崎豪雨災害で体験したが、まさに天のバケツの底が抜ける雨。長崎県庁玄関ロビーには外に出られない人で溢れた。このような雨量になってしまえば身動きが取れないのは確かである。

早めの注意喚起がいかに必要なか。町役場の対応へのメディアの一方的な批判は災害後の「後知恵」にも思えるし、メディアで働く者自身も、気象庁のさまざまな警報やレーダー情報から「やばいぞ」と事前に危険を察知し、伝えていたのだろうかとか問いかけたくなる。

行政や大学の管理者は、気象情報に対してどういう要素を考慮して判断したのだろうかとか学生に考えてもらった。台風や局地的な豪雨がますます多発化する昨今。国や自治体、そして民間で、人の命を預かる立場にもなる本学の学生たち。報道機関に限らず、自らが情報を読み解く力、自然の力を肌で感じる「防災リテラシー」を身につけてほしいと学生たちに伝えた。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第30回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(10月～12月)

10月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」学習支援ボランティア
10月～12月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
11月～12月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

当分室がある岩手県遠野市は、これまで繰り返されてきた三陸沿岸地方の津波被害に対し「後方支援拠点」として活動を行ってきた経緯があり、今回の震災でも、発生直後から即座に沿岸被災地への後方支援活動を行いました。その活動は全国的に高い評価を受けており、市の担当部署となる「沿岸被災地後方支援室」には、北は北海道から南は沖縄まで、現在も視察に訪れているそうです。

遠野市では本年9月に、東日本大震災に関する後方支援の記録と成果や課題などの検証結果をまとめた「3.11東日本大震災 遠野市後方支援活動検証記録誌」を発行しました。A4判サイズで、全7章343ページからなる重厚なものです。本学の復興支援の活動も掲載されていますので、是非御一読ください。購入方法等詳細については、遠野市のウェブサイト(<http://www.city.tono.iwate.jp/>)右側にある当該記録誌のバナーから御覧ください。

また、10月1日付けで当分室メンバーに「菊池生恵(きくちいくえ)」さんが加わりました。前任の方は岩手県沿岸部の出身でしたが、菊池さんは生粋の遠野人で、しかもこちらに来る直前まで前述の「遠野市沿岸被災地後方支援室」に勤めておられました。

即戦力の頼りになるメンバーを得て、おらもますます「きばって」いぐべがね! (「きばる」～遠野の方言で「がんばる」の意)

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」



(左) 新たに分室メンバーとなった菊池生恵さん

(右) 遠野市が作成した「後方支援活動検証記録誌」

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
10月18日	本部国際企画課	英国・シェフィールド大学が来学し、共同研究シンポジウムを開催	10月9日～10日
10月22日	空間情報科学研究センター	ITS 世界会議に出展しました	10月14日～18日
10月22日	本部外部資金課	平成 25 年度ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞表彰式を開催	10月8日
10月23日	卒業生室	第 12 回東京大学ホームカミングデイを開催	10月19日
11月5日	本部国際企画課	韓国・ソウル大学 Oh Yeon-Cheon 総長一行が来学	10月23日
11月5日	本部国際企画課	ドイツ大学学長会議ホルスト・ヒップラー会長が来学	10月22日
11月6日	大学院工学系研究科・工学部	Boeing Japan 及び三大学共催「航空システム国際 PBL」発表会で東大チームが優勝	9月27日
11月6日	柏地区共通事務センター	柏キャンパス一般公開を開催	10月25日
11月7日	本部国際企画課	米国プリンストン大学アイズグルーバー学長が来学	10月29日
11月7日	医科学研究所	医科学研究所慰霊祭を挙行政	10月17日
11月8日	大学院総合文化研究科・教養学部	駐日中国大使夫人・汪婉氏の学術講演会が開催されました	10月22日
11月8日	生産技術研究所	第 9 回東京大学駒場キャンパス技術発表会開催される	9月11日
11月12日	本部国際企画課	第 8 回日中学長会議が厦門で開催	11月1日

(10月18日～11月15日掲載分)

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
11月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
11月5日	広報室	本年秋の紫綬褒章受章・文化功労者顕彰	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/1282/

CLOSE UP



汪婉氏と講演に聴き入る来場者



懇談会で談笑される汪婉氏

駐日中国大使夫人・汪婉氏の学術講演会が開催されました (大学院総合文化研究科・教養学部)

10月22日(火)16時半より、駒場Ⅰキャンパス 21KOMCEEレクチャーホールにおいて、駐日中国大使夫人・駐日中国大使館友好交流部参事官汪婉氏による学術講演会が開催され、本学学生やご来賓など約150名が会場を埋めました。

総合文化研究科で博士学位を取得され、現在は外交の現場で活躍する汪婉氏は、「中日関係をみつめて—研究と実践の両面から」と題して、ご自身の留学時代の思い出、研究、そして外交官及び大使夫人としての活動を語られました。

駒場は学際的、国際的で、教員とのコミュニケーションがとりやすく、開かれた学問の場であったと、懐かしそうに語られました。またご

自身の研究の中から、西洋型近代教育と国民意識醸成に役割を果たした日本の教育システムが19世紀末から20世紀初頭にかけて清政府に注目され、日本留学経験者が地方教育行政システムの中で重用されたことについて、具体的な史料やデータを示しながら紹介されました。さらに、日中の友好関係を深めるための様々な取組を臨場感あふれる写真とともに紹介されました。

講演会後の懇談会では、汪婉氏の駒場留学当時を知る教員などからの思い出のエピソードが披露されたり、汪婉氏が中国人留学生や中国について学ぶ日本人学生と談笑されたりするなど、大変和やかな雰囲気で会が終了しました。



CLOSE UP

第12回東京大学ホームカミングデイを開催（卒業生室）



本年度の様子

10月19日(土)、本郷キャンパス・駒場キャンパスにて「第12回東京大学ホームカミングデイ」を開催いたしました。

当日は多くの講演会や同窓会が催されました。またご家族連れでキャンパスを訪問された卒業生も多く、いつものキャンパスと一味違った賑

わいを見せました。来場者数は約5,200名でした。

2014年のホームカミングデイは2014年10月18日(土)を予定しています。なお、当日の様子は以下のサイトに掲載いたします。

<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd/>



CLOSE UP

柏キャンパス一般公開を開催（柏地区共通事務センター）



大気海洋研究所の体験企画の様子

今年は「知りたい！触れたい！科学の世界」をテーマに、10月25日(金)、柏キャンパス及び柏Ⅱキャンパスにおいて一般公開が開催されました。柏キャンパスの大学院新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所、大気海洋研究所、人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、情報基盤センター、国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構、高齢社会総

合研究機構、環境安全研究センター柏支所、国際センター柏オフィス、柏図書館及び柏Ⅱキャンパスの生涯スポーツ健康科学研究センターが参加し、日頃の研究成果の紹介、実験や体験コーナー、ガイドツアー等それぞれ特色ある催しが行われました。不運にも二つの台風が関東地方に接近したため、2日目の開催が中止となりましたが、2,000名を超える来場者が訪れました。



CLOSE UP

ソウル大学Oh Yeon-Cheon総長一行が来学（本部国際企画課）



両大学の出席者一同

10月23日(水)、韓国・ソウル大学Oh Yeon-Cheon総長一行が来学し、濱田純一総長ら本学関係者との間で、アジアにおける非英語圏の国際的な大学としての教育・研究の在り方や、両大学間の学術交流推進等について意見交換を行いました。一行はさらに、情報学環・学際情

報学府の現代韓国研究センターを訪問し、木宮正史センター長等と韓国研究の現状の共有や今後の研究交流の在り方等について懇談しました。

今回の来学は、本年1月に本学役員がソウル大学を訪問し、グローバル人材育成等について意見交換を行ったことに続くものです。



CLOSE UP

プリンストン大学アイスグルーバー学長が来学（本部国際企画課）



懐徳館における懇談

10月29日(火)、米国プリンストン大学のアイスグルーバー学長が来学し、濱田純一総長、松本洋一郎理事、江川雅子理事、羽田正副学長・国際本部長らと懐徳館にて懇談しました。アイスグルーバー学長が第20代学長として7月に就任されてから、初めての海外大学訪問となりま

した。本学はプリンストン大学と戦略的な提携関係を構築することで合意し、東京大学-プリンストン大学共同研究・教育プロジェクトの公募を実施しました。その担当教員によるプロジェクトの紹介に加え、今後の両大学の連携に係る意見交換や東大茶道部によるお茶会も催されました。

本年秋の紫綬褒章受章・文化功労者顕彰（広報室）

難波成任 教授（大学院農学生命科学研究科）、今井浩三 特任教授（医科学研究所）、喜連川優 教授（生産技術研究所）が、本年秋の紫綬褒章を受章いたしました。

また、廣川信隆 特任教授（大学院医学系研究科）、久保田淳 名誉教授（大学院人文社会系研究科）、山岸俊男 特任教授（大学院総合文化研究科）、榊佳之 名誉教授（医科学研究所）が、文化功労者として顕彰されました。

受賞記事は左記「お知らせ」のURLをご覧ください。

表紙について



今年度から本部国際交流課が各種媒体でアイコンとしても使用している飛行機のイラスト。海外へ飛び立つ東大生をイメージしたものです。国際交流課では3年ほど前から“Go Global”をキャッチフレーズに、学生の海外派遣促進のため、留学フェア・ガイドブック・ウェブ・SNSを通じた広報活動を展開しています。



大学院の変遷と学生評価

大学院の教育に30年以上関わってきたが、入試のやり方を振り返ると隔世の感がある。大学院重点化によって修士の定員が増え、学部学生の大多数に加えて他大学からの学生も相当数を受け入れている。そのため過去の大学院入試は、主として内部の学部生が対象であり、既に学力を把握している人物について研究に適した資質を持つか否かを判定する目的で行ったが、現在は広く門戸を開いた中で基礎学力や思考力に基づいて選考する目的に変わっている。学部入試にやや近い性格を帯びたため、不手際が万一あると、いわゆる入試ミスに関する厳しい批判を浴びやすくなった。現在我々は規定に従い、幾重ものチェックを繰り返し、問題に誤りや誤解の生じないように、万全の体制を取っている。この体制を支える、多くの教員の献身的な努力に敬意を表したい。

しかし教育に関して、入り口としての入試が大切なことは当然であるが、その後の指導や評価こそが社会に対する大学の責務である。指導やカリキュラムに関しては、抜本的な改善を指向する濱田総長の意図に賛同する。

ここで最後の関門である卒業時の評価につ

いて考えたい。上述のような大学院の変遷の結果、多数の多様な修士学生がいるため、必ずしも全員が完成度の高い修士論文を書けるわけではない。出口の評価を厳格にすることが望ましいが、何回チャレンジしても審査を通らない場合も起きるであろう。博士と異なり修士の場合は卒業後に研究の機会が得にくいため、単位取得後退学をすると、結局、何の学位も取れないことになる。皆が修士号をとれるように指導教員は多くの努力をするが、これが効率的な教育だろうか。

例えば制度の改革で、修士論文を完璧に完成した学生に与える学位と、授業単位は取得し研究室で研究遂行の基礎を学んだ学生に与える学位と、名称を含めて区別すれば、教員は修士号を取らせることを自己目的化せず、学生に適した密度の濃い指導を行えるようになる。また外部には、卒業時の評価をきちんと行っていることを示せる。これは愚案にすぎないが、制度や規則は、教員が研究教育の本質に集中できるように最適化する方向で考えることが大切だと思う。

藤田博之
(生産技術研究所)